

2003年度

海外学会派遣プログラム参加報告

ブ・ティ・ミン・チー 「オランダの会議の報告」 -----

白 寅秀 「実りあるアメリカでの学会参加記」 -----

金 香海 「新型肺炎と北東アジア国際協力」 -----

梁 興国 「アメリカから日本と中国へ」 -----

朴 栄濬 「アメリカ東北部訪問記」 -----

曹 奎煥 「2003年アメリカ地質学会」 -----

林 泉忠 「ニュージーランド華人研究調査の旅」 -----

オランダの会議の報告

フ ティ ミン チィ
Vu Thi Minh Chi

博士（地域研究）一橋大学
人間科学研究所研究員（在ハノイ）
1999年度奨学生

2002年7月1日から6日まで、IHEU（International Humanist And Ethical Union）の設立50周年記念の国際会議がオランダのアムステルダムで開催されました。「Human diversity, Human rights and Humanism」というテーマのこの国際会議には、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ベルギー、ロシアなどのヨーロッパ諸国、インド、インドネシア、パキスタンなどのアジア諸国、そして南アフリカ、コスタリカなど、世界各国から500人以上が集まりました。（珍しいのは、日本の代表がいなかったことです）。私も、渥美国際交流奨学財団の海外派遣助成を受けて同会議に参加できました。

会議は、ワークショップ、遠足、ビデオプレゼンテーションそしてカルチャーイベントなど豊富な形式で行われました。オランダの首相も来て挨拶をしました。

会議のラウンドテーブル・ディスカッションは、14のテーマにわかれしました。それは、社会統合（Social Inclusion）、難民の受け入れ（The Reception of Refugees）、ヒューマニズム・人権問題と人間の価値（Humanism, Human Rights and Human Values）、教育問題：人間発達の鍵（Education: The Key to Human Development）、ヒューマニズムとイスラム（Humanism and Islam）、安楽死（Euthanasia: Personal Integrity as a Fundamental Human Right）、貧困・人口・ジェンダー問題および人間の発達（Poverty, Population, Gender Equality and Human Development）、インターカルチャー・ゲーム

（Intercultural Game）ヒューマニスト組織における青少年の教育開発（Developing Youth in Humanist Organizations）、キャンペーンとメディア（Campaigning and the Media）、国際舞台におけるヒューマニズム（Humanism in the International Arena）、多様性の力（The Power of Diversity）、レスビアン・ガイ問題などです。

7月6日の午後、国際会議は、参加者のすべてがヒューマニズムに関する「アムステルダム宣言」を採択して閉幕しました。

会議が終わってから、7月7日と8日、Utrecht市の人文大学（University for Humanist Studies）が主催した「Empowering Humanity. Work in Progress」国際シンポジウムにも参加しました。このシンポジウムは、またヒューマニズムの理論及び実践、新しい学問であるヒューマニティック、平等及び多様性、生活の質及び福祉問題などのいくつかのテーマで行われました。

会議で収穫できた情報や知識をベトナムの「人間研究」誌に紹介しました。そして、2002年9月に Vietnamese Humanist & Ethical Education Association（人文・道徳教育協会）がベトナムの教育学・心理学学会の分科会として設立されました。

国際会議に参加できる機会を与えてくださった渥美財団に感謝の意を表し、今後ともベトナムの人文・道徳教育協会の活動にご支援ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

実りあるアメリカの学会参加記

ベック インス
白 寅秀

博士（商学）早稲田大学
大韓民国産業資源部産業研究院副研究委員/高麗大学非常勤講師（在ソウル）
2002 年度奨学生

2003年5月26日から28日の4日間、渥美財団から学会派遣の助成を受け、アメリカで開かれた Business History Conference に参加した。アメリカ東部のボストン近くにあるローウェルという小さな町で行われた学会は、私にとって初めての国際学会参加であった。

ここで、日本で書き上げた私の博士論文のエッセンスを発表することになった。英語で発表することが不慣れであったため、発表当日まで緊張していたものの、発表の後には、「優れた研究である」というコメントをもらい、ほっとした。とくに、私のコメントーターをしてくださったハーバード大学ビジネススクールのナンシー・コーヘン教授は、私に対して「A Keen student of retailing ,entrepreneurship and the significance of national concept」と評価してくださった。当日、発表した研究報告の内容は次のインターネットサイトで原文を見ることができる。

<http://www.thebhc.org/publications/BEHonline/2003/beh2003.html>

この学会では、大学院時代の恩師である宮島教授にもお会いすることができ、ボストンでの夕べを一

緒に過ごすことができた。宮島先生は、以前ハーバード大学で交換教員として生活した経験をお持ちだ。ボストンの海岸を眺めるレストランでロブスター料理を楽しみながら、楽しい会話を交わすこともできた。

私は博士号を取得したのち、韓国に戻り、政府のシンクタンクで働きながら、政府のニーズに応える研究を進めているが、宮島先生が日本の経済産業省の仕事をしてきたことから、いろいろと参考になる知恵を得ることができた。

学会からの帰りにはニューヨークに住んでいる親戚の家を訪ねた。10年以上離れていたために、しばらく面と向かって話す機会が少なかった親戚と、久しぶりに楽しい時間を過ごした。韓国で仕事が続いていたので、長く滞在することはできなかったものの、まる一日、ニューヨークにある名所をたずね、今まで教科書でのみ得ていた情報を自分で歩いて手で触ることができたことは私にとって貴重な体験であった。

全部で一週間足らずの短いアメリカへの旅だったが、研究成果を報告し、恩師に会い、また、懐かしい親戚に会えたことは、とても豊かな収穫であった。

新型コロナウイルスと北東アジア国際協力

きん こうかい
金 香海

博士（政治学）中央大学
中国延辺大学政治学部副教授
2001年度奨学生

私は2003年3月に母校にもどり教鞭をとることになった。丁度そのとき、中国では新型コロナウイルス（SARS）が大流行し、国中が大騒ぎになって、私も学生達の健康管理に骨が折れるほどだった。6月に渥美国際交流奨学財団の学会派遣助成を受け、中央大学主催の国際シンポジウムに参加することが決まった。しかし、そのとき中国では新型コロナウイルスが流行している最中だったので、日本に行けるかどうか非常に心配だった。

成田空港に到着するとチェックが厳しく、また機内で渡された入国管理局の「日本滞在注意要項」では15日以内は滞在先を離れない、人との接触を一切しないようにと書いてあったので、日本のルールを守るのが基本だと思った。日本には迷惑だから、こんなときに日本に来るべきではなかったとも思った。だが研究発表のためには仕方が無い。日本の方には本当に申し訳ない気分で一杯だった。4ヶ月前に日本に居た時とはまったく違った気分で、なんとも寂しく感じた。新型コロナウイルスの流行は重大なことで、入国管理局の許可がなければどうにも動くこともできず、勝手に動くと迷惑をかけるだろうと判断した。研究活動には非常に不便だった。国の大騒ぎからようやく抜け出して、ゆったりした旅行ができると思ったが、結局、さっさと日程を終わらせて帰ることになった。午後2時に成田で飛行に乗ったら7時に故郷の延吉空港に到着した。1年前までは2日かかったのが今は半日になった。東京と延吉は本当に近い距離だなと思った。

帰ってからのいろんなことを考えた。国際政治を日

本で学んだ私にとって、これから何をしたらいいか、また何をすべきなのか。今私達が生きている北東アジアの生存環境は楽観できない。核、新型コロナウイルス、鳥インフルエンザ、黄砂などいろいろな問題がこの地域の人々の安全を脅かしている。これはまさにいろいろなレベルでの安全保障問題で、今後このような問題にうまく取り組まなければならない。なぜならば私達北東アジアの人々は、同じ地理的な空間で生活しており、直面している脅威も同じだからである。この意味で北東アジアは一つの共同体だし、危機意識を共有すべきである。



中央大学にて

今回アジア諸国で流行した新型コロナウイルスに対する協力、および協力の中で生まれた機能は、今後この地域の問題解決に非常に参考になると思う。上述した問題を解決するためには各国の情報公開、情報交流が必要であり、ある種のレジームを作って予防措置をとることが重要である。ここから出来上がった機能を

別の問題、たとえば、核の問題、歴史認識の問題、拉致問題などの問題領域に広めて包括的な解決策を模索する。このようなステップを重ねながら 北東アジアの平和的な環境を着々と構築することが望ましい。

そのためには 北東アジアの市民社会の育成に力を入れ、平和のすそ野を広めること、その中でも特に文化交流と学校教育が重要である。若い世代に環

境問題、新型肺炎などの共通の問題の重要性を強く意識させ、コンセンサスに基づいて共同且つ自由に取り組む能力を身に付けることが、私達教育者としての責務ではないかと思う。私は今、学校教育でこのような課題に取り組んでいる。この意味で渥美国際交流奨学財団の学会派遣助成を受けた今回の旅行は 大きな成果を得ることができ、財団には心から感謝している。

アメリカから日本と中国へ

りょう こうこく
梁 興国

博士（化学生命工学）東京大学
ボストン大学先端バイオテクノロジー・センター研究員（在ボストン）
2001 年度奨学生

2003年7月16日から25日まで、財団の助成をいただき、アメリカ - 日本 - 中国 - アメリカの旅をした。16日ボストン空港を出発し、17日の午後、成田空港に到着。次の早朝、財団のスタッフや2003年度の奨学生たちと、新幹線で鹿島建設軽井沢研修センターへ。

18日の夜と19日の午後、第12回S G R Aフォーラム（軽井沢で2度目）に参加し、大変意味深い「環境問題」について、すばらしい報告・講演・及び熱いDiscussionをいただいた。地球温暖化などきびしい環境問題、人類が地球を壊す姿を目のあたりにした。幸いなことは、世界中の人々が立ち上り、その問題を解決しようと努力をしていることだ。アメリカの朝の車の流れ（95%以上の車の中は運転手のみ）を思い出しながら、私は車を一生使わないと話した。それは冗談かもしれないが、我々の美しい地球を保つためには、巨大な影響力をもたらす60億の人々の生活習慣をいい方向にむける努力をするのが一番であると思った。ものを直すのは壊すよりはるかにむずかしいので、根本的な方法はやはり

壊さないことだ。

20日の早朝、涼しい軽井沢をはなれ、暑い東京に戻り、元の研究室である東京大学の小宮山研を訪ね、小宮山先生、浅沼先生と私の投稿論文及び協力研究などについて話した。（その論文は、2003年12月にアメリカ化学学会誌[JACS. 125. 16408 -15]に発表した）午後、年に一度の研究室全員の合宿に参加した。箱根の山中で、研究室の先輩や後輩と話しながら、すてきな1日をすごした。

21日の午後、成田から北京へ。22日、中国の天津大学で、昔の先生たちと食事をしながら、留学と外国での研究生活を話した。天津大学の人事部長と、化学工程学院院長から、天津大学の現状と発展企画などを聞き、私は条件がそろったら、天津大学に戻ってがんばりたいと話した。

7月22日から3日間、家族（河北省青島）と一緒に貴重な時間をすごした。皆の生活は、ますます改善している状況を見て安心した。25日北京から、成田空港、デトロイト空港経由、ボストンに到着、10日間の充実した旅を終了した。

それから、毎朝、40分間歩いて通勤する生活がまた始まった。

アメリカ東北部訪問記

パク ヨンジュン
朴 栄濬

博士（国際社会科学）東京大学
国防大学校安全保障大学院助教授（在ソウル）
2002年度奨学生

私は2003年7月25日から8月7日まで渥美国際交流奨学財団の研究支援を頂いて、アメリカ東部の主要大学や研究機関を訪れ、そこでの国際政治学に対する研究関心一般と、特に日本研究傾向を伺う貴重な機会を得た。私は1998年から2002年に及ぶ日本での留学生活を通して日本政治外交史を勉強してきた。ところで政治外交史とは広い意味で国際政治学の領域に属しており、国際政治学で取り扱われている主な概念や理論は、欧米の国際政治学、なかんずくアメリカの国際政治学に負っている所が大きい。それ故、私としてはアメリカ国際政治学界への見聞やアメリカ学界での日本研究傾向を伺いたかったのである。

それで私の旅程は、東部の主要大学と研究所、そして書店を回る日程で埋められた。先ず行ったのがニュージャージー州の静な学園都市に所在しているプリンストン大学であった。プリンストン大学では、国際政治研究者として著名なギルピン(Robert Gilpin)教授や現代日本の政治経済研究者として知られているKent Calder教授らが在職している。特にギルピン(Gilpin)教授の現実主義国際政治理論については、深い関心を抱いたこともあり、博論でもそれを適用した。しかし夏休みを迎えたキャンパスでは研究者や学生の姿があまり見えなかった。やむをえず大学書店に行って、アメリカで発行されてい

る国際関係分野の研究成果を一見することで、プリンストン大学への旅を終えた。

学問の全分野で世界最高水準を誇るハーバード大学にも行った。この大学では、特に子供を連れてきた東洋系の両親たちがキャンパスのあちこちをツアーしている姿が印象的であった。あらかじめ、日本研究センターとして有名なライシャワー日本研究所のルイコさんとインタビューの約束を取っていた。典型的な日本女性の親切さを身につけていたルイコさんは、夏休みのために私がゴードン所長のような日本研究者と直接に接触できないことを悔やみつつ、研究所に関する豊富な資料をくださった。その資料にはライシャワー日本研究所の沿革のみならず、ハーバード大学で日本関連研究をやっている研究者や院生らの研究テーマが載っていた。私の東大留学中に出会ったトルコ出身のハーバード大学院生の研究活動に関しても伺うことができた。ルイコさんの紹介で、私の先輩であり、ライシャワー日本研究所の客員研究員として滞在されていた金鳳珍北九州大学教授に会い、ハーバード大学での東アジア研究に関する有益な対話を交わしたことも大きな収穫であった。

ワシントンに行った際には国立公文書館に寄ってみた。国立公文書館はアメリカ政府の公文書を集めて研究者に提供しており、日本や韓国の現代史に関

しても貴重な史料が所蔵されているところであった。国立公文書館の入口通路には、「過去とは序曲である(What is Past is Prologue)」と書かれていた。東京に滞在していた時、防衛研究所の戦史部や外交史料館にも度々通っていた私は、文明国に共通するのは、自分の歴史を大事にすることではないかと思った。

ニューヨークでは国際政治と関連した場所としてグラウンド・ゼロと国連本部を訪れた。グラウンド・ゼロでは、新しい建築計画が立てられたようで、その基礎工事が行われていた。9・11事件が発生した時、私はお台場の国際交流館に住んでいた。当時NHKから流れた画面、即ち世界貿易センタービルが崩れる場面と黒い煙にニューヨーク市内がさらされていた場面が昨日のように甦った。冷戦体制の解体後、名実ともに世界超大国になったアメリカのシンボルみたいな建物を、ゲリラ何人かが直撃した。高度の文明や超大国さえ、燃える憎悪の前ではどんなに脆弱なものであるかが示された。その憎悪の種をどのように減らしていくかが、大国の外交政策に

おいて大きな課題にならなければならない。少なくとも国連本部は、憎悪の種を減らす問題に関心を持っているように見えた。その広場で展示されている彫刻品やその書店で販売されている国際関係の書物はみな、平和の大切さと相互理解や国際協力の重要性を訴えるテーマのものが多かったのである。韓国や日本ではやや遠く感じられた世界の普遍的な理念をニューヨークでは目の前で感じるような気がした。

その他、ニューヨークのセントラルパークとメトロ・ポリタン美術館、ワシントンでの国会議事堂とナショナル・ギャラリー、そしてホワイトハウスとアメリカ歴史博物館などを巡りながら、アメリカの歴史や文化を感じ取ろうとした。しかし2億の人々が200年余りにかけて建設してきたアメリカ文化の全貌を2週間足らずの旅で捉えるのは不可能であった。私はこの旅がこれから積み重ねていくアメリカ理解、そして世界理解への糸口になるだろうと期待している。こうした貴重な機会を与えてくださった渥美国際交流奨学財団の皆様へ改めて御礼を申し上げる。

2003年アメリカ地質学会

2003 The Geological Society of America Annual Meeting

チョウ キュウファン
曹 奎煥

博士(理学)早稲田大学
早稲田大学教育学部助手
2002年度奨学生

私はアメリカ西海岸で1年間留学した経験もあり、アメリカはなぜか、異国の匂いがしない感じがしていました。しかしながら、正直、学会発表がある日は朝からそわそわして、落ち着かない時間もありましたが、自分の研究成果を早く披露したい気持ちで楽しみもでもありました。

アメリカ地質学会(2003 The Geological Society

of America Annual Meeting)は海外の地質学会の中でその規模が大きくて歴史も古く、地質分野ではとても著名な学会で、私は今年で4回目の参加でした。私は、2002年11月2日~5日にシアトルのWashington State Convention & Trade Centerで開催された2003年アメリカ地質学会にて発表しました。この学会はアメリカ地質学会の会員が柱とな

って、世界各国から権威のある地質系の研究者が多数参加し、熱い議論の場となり、地質系全般の専門領域の情報交流や共有に大きく貢献しています。

私は、岩石の変形集中の証拠を見つけ出すために、様々な方法論を講じてきましたが、やっと、地球の大陸の動きによって、なぜ、岩石に変形が集中するのかについてよい成果がでましたので、その結果を発表しました。今までは、岩石の変形集中の原因は様々で、その証拠を探すことはとても難しいと言われてきました。それは、長い歳月（約1億8千万年前）の間に何回も変形を受けたのでその証拠たるものが消されて残らないことが一般的であるからです。しかしながら、今回、私はその証拠を見つけ出すことに成功しました（その方法は企業秘密！？）。私の発

表は大反響があり、いろいろな専門家と話ができました。そして新たな研究方針を決めることもできた大変有意義な学会でした。

4日間の学会が終わってからは、数十セッションに分かれて自分の専門と関連するか興味がある分野に参加し、3日間地質見学が行われ、他の国で見られない大変貴重な地質現象を見ることができました。もちろん、見学に行った地方の文化や歴史や自然に触れることもでき、研究者との交流と専門知識や視野を広めることもでき、また、海外旅行（？）もできたので、良い専門分野だと思いました。

最後に、この学会への参加は渥美国際交流奨学財団の「海外学会派遣プログラム」の支援をいただきました。ここに、感謝の意を表します。

ニュージーランド華人研究調査の旅

リム チュアンティオン
林 泉 忠

博士（国際政治）東京大学
琉球大学法文学部助教授
2000年度奨学生

2004年3月5日朝、これまで行ってきた華人研究の一環としてニュージーランドの華僑・華人状況を調べるために、成田空港から約2週間に渡る調査旅行へと出発した。比較的安かったガルーダ航空を利用したが、インドネシアのデンパサールとオーストラリアのブリスベンでの経由時間が予想以上にかかり、およそ24時間後の現地時間6日午後1時半頃、ようやくニュージーランドのオークランド空港に着いた。

今回の研究調査はニュージーランド北島のオークランドとウェリントンを中心に行った。訪問先は、国立公文書館、移民局、統計局といった政府部門のほか、中国総領事館、台湾の代表部、オークランド大学、ピクトリア大学、そして屋崙華僑会所をはじ

めとするいくつかの華人組織だった。



ニュージーランド国立公文書館

訪問先で入手した華人社会に関する一部の資料によれば、2001年現在、ニュージーランド総人口379万のうち、中国系は100,203人で2.

2%を占めており、アジア系移民の中でもっとも多い。ちなみに、日系は1万人程度。華人の内枠を見ると、中国本土、香港、台湾系、そして東南アジア（マレーシアやカンボジアなど）出身の華人がそれぞれ約四分の一を占めている。8割以上の華人は109万人の人口を有するニュージーランドの最大都市であるオークランドに集中して生活している。残った2割弱は、首都のウェリントンや南島のクライストチャーチなどに散在している。



屋崙華僑會所にて

華人のニュージーランド移民の歴史はすでに百年を超えている。オークランドで最も歴史のある華人組織・屋崙華僑會所の陳秘書によると、1980年代以前の中国系移民はほとんど広東省や香港出身で、華人コミュニティの共通語は広東語だった。香港からの移民は、時期的にやはり80年代後半から90年代の半ばまでが多かった。しかし、香港の中国への返還を恐れて移住してきたこの時期の香港移民の多くは、ニュージーランドで満足できる仕事を見つけられなかったため、市民権を取得した後、近年、香港に「回流」する現象が起きた。とはいえ、ニュージーランドで頑張っている香港出身の移民も少なくない。現役でニュージーランド史上最初の東アジア系国会議員であるペンシー・ウオン（黄徐毓芳）も香港出身だ。ちなみに、政界まで進出している中国系の移民の中に、ハット市副市長を務めたモリー・ガン・キー（Mollie Ngan Kee）氏などが挙げられる。

1990年代半ばに入ると、香港出身の移民が減少しているのに代わって、中国本土からの留学生お

よび高校以下の「小留学生」の増加が目立っている。中国の「出国ブーム」を背景に、留学・移民条件が比較的良いニュージーランドに目が向けられたからだ。インタビューを受けた瀋陽出身で50才前後の趙さんは、娘のニュージーランド留学に伴い、家族ビザでウェリントンにやってきた。ニュージーランドでの生活がまだ2年しか経っていないにもかかわらず、既に4ヵ月前に中華ファーストフードの店を開いた。経営満2年になると、移民の申請もできるそうだ。新華僑のエネルギーに溢れた趙さんは、やはり小国のニュージーランドの生活に満足できず、将来、娘のアメリカの大学院進学と共に、超大国のアメリカへと移住することを計画しているという。



インタビューに応じてくれた趙さんと

趙さんのようなケースがどれほど多いか分からないが、中国系をはじめとするアジアからの留学生は確かにここ数年急増している。特に名門のオークランド大学やビクトリア大学の中国系留学生が年々増えており、キャンパスでも三人か四人に一人の中国系学生が見られるほどだ。また、二つの大学ではそれぞれアジア研究学科が設けられており、学部のコースにとどまらず、博士課程まで充実している。ビクトリア大学研究センターの主任ライラ(Laila)氏は、中国研究をはじめとするアジア研究がますます盛んな背景には、やはり中国系留学生や移民の増加が目立つと共に、中国の著しい経済発展が注目されているからだと言った。



オークランド大学にて

今回の充実した調査旅行は、渥美国際奨学財団の多大な支援で実現した。時間などの関係で大規模なアンケート調査は不可能だったが、華人移民が急増しているニュージーランド華人の全体像を把握することができた。それを今後の更なる研究に生かしたい。



ビクトリア大学アジア研究所ライラ主任と